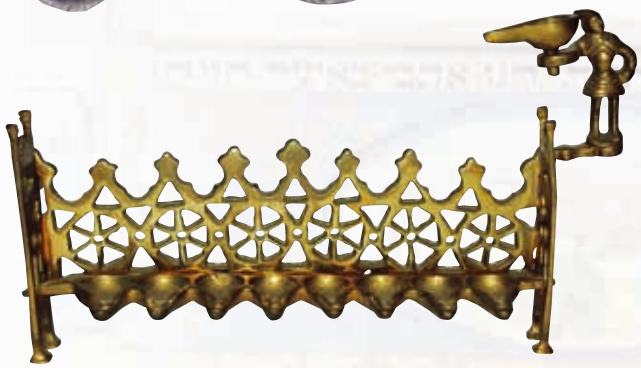
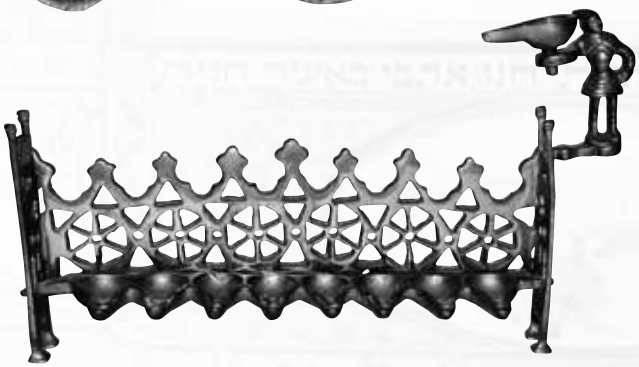


ジュダイカ・コレクションⅢ

祈りの継承

ユダヤの信仰と美術

祈りの源流にあった灯火
そして生み出されたものとは



ジュダイカ・コレクションⅢ

祈りの継承

ユダヤの信仰と美術

祈りの源流にあった灯火
そして生み出されたものとは

ごあいさつ

ユダヤ教はキリスト教の母体となった宗教です。ユダヤ教の聖典であるトーラーが、キリスト教のなかでは旧約聖書とされるものの一部であることからも、そのつながりは明らかです。キリスト教精神にのっとり建学された本学にとって、その母体であるユダヤ教に関する理解は非常に重要です。

ユダヤ教に関する資料は西南学院大学博物館の特色のひとつであり、今回は第3回目の「ジュダイカ・コレクション」展示です。ご来館の皆様には「ジュダイカ・コレクション」の特色をご堪能いただければと願っております。

「ジュダイカ・コレクション」は、西南学院大学名誉教授である関谷定夫先生によって蒐集されたものです。関谷先生は聖書考古学を専門とする研究者で、ユダヤ教の祝祭や儀礼における祭具、古代イスラエルの生活用具などを長い時間をかけて集めてこれらました。体系的で良質なコレクションであることは、世間に広く知られています。今回は、先生の体系的なコレクションを「美術」という視点から展示しております。古代から現在にいたるまでの、信仰・生活の場におけるユダヤ教の信仰を、「ジュダイカ・コレクション」を通して知ることができる展示になっていると思います。

末筆ではございますが、ご協力いただきました関谷定夫先生、および関係各位に心より御礼申し上げます。

2014年11月7日

西南学院大学博物館

館長 宮崎克則

開　催　趣　旨

キリスト教の源流であるユダヤ教を信仰するひとびとは、かつて祖国を失い世界中に離散した。彼らは信仰を拠りどころにアイデンティティを保ち、定住した地域の文化に刺激を受けながら多様な“かたち”を創出していった。

それらはジュダイカと呼ばれ、ユダヤ教の祭具等を含む文物一般のことを総称するものである。ユダヤ教を信仰するひとびとにとって、祭祀と生活は密接な関係があり、多くのジュダイカが生み出されてきた。また、それらはユダヤのひとびとの生活に根ざした一方で、尊敬の対象として特別な装飾がほどこされてきた。華美荘厳なジュダイカは、ユダヤの美術工芸品として高い評価も得ている。

これまで本大学博物館では、ユダヤの祈りや生活にスポットをあてた展覧会を開催してきた。第3回目となるジュダイカ・コレクション展では、ジュダイカを美術という視点で捉えていく。ジュダイカの美術工芸品としての価値と同時に、その意匠が持つ宗教的意味を認識することで、ユダヤ教の理解を深めるものにしていく。

｜会　期｜2014（平成26）年11月7日（金）～ 2015（平成27）年1月17日（土）
｜主　催｜西南学院大学博物館
｜協　力｜関谷定夫氏（西南学院大学名誉教授）

目　　次

ごあいさつ　西南学院大学博物館　館長　宮崎　克則　2

開催趣旨　3

目次・凡例　4

本編

序章　ユダヤの美術　5

1章　信仰のかたち　9

1-1　トーラーと装飾

1-2　シナゴーグと祭具

2章　彩られた祝祭と儀礼　19

2-1　祝祭と祭具

2-2　通過儀礼と祭具

3章　安息日の祈り　30

終章　ともし火の系譜－聖書考古学　34

論考　「ジュダイカの多様性とその背景　－ケトゥバーを例に－」
西南学院大学博物館　学芸研究員　内島美奈子　39

「宗教の展示事例　－ベルリンのユダヤ博物館－」
西南学院大学博物館　学芸員　安高　啓明　43

出品目録・イベント情報　46

凡例

◎本図録は西南学院大学博物館秋季特別展「ジュダイカ・コレクションⅢ 祈りの継承－ユダヤの信仰と美術－」〔会期2014年11月7日（金）～2015年1月17日（土）〕開催にあたり、作成したものである。
◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。
◎本図録の資料解説および編集は安高啓明（本学博物館学芸員）、内島美奈子（本学博物館学芸研究員）がおこなった。英文翻訳ならびに編集補助には、山尾彩香（本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程）、出口智佳子（同上）、下園知弥（同上）、阿部大地（同上・本学国際文化学部生）があたった。

序章 ユダヤの美術
Jewish Art

ジュダイカとはユダヤ教の祭具等を含む文物、そのなかでも美術工芸品をさす言葉として用いられる。ジュダイカは、ユダヤの長い歴史を反映するかのように多様なものであり、時代や地域によってその装飾の程度や様式は異なっている。そのなかで、共通して用いられる装飾のモチーフがある。それらは幾何学や植物の意匠、ヘブライ文字、最も重要な祭具メノラーなどがあげられる。これらのモチーフは信仰の場、生活の場でさまざまなものに見ることができる。また、造形美術に対する態度は時代によっても異なり、古代ではモザイクなどに豊かな装飾がなされ、中世では写本の装飾、近世では工芸品などが発展した。

Judaica is the term used to indicate all crafts created by the Jewish, including their ritual artifacts, and it especially refers to finely crafted tools of common use. A long history is told through the different styles and degrees of decoration of the items displayed, also depending on the period and location of employ. Some common motifs link the works through geometrical patterns, floral designs, hebrew inscriptions and the representation of their central relic of worship, the Menorah. We can appreciate in these recurring traits the daily routine and system of beliefs leading their lives. Also, we may notice a difference of attitude varying by time and location of the subjects portraited. For instance, richly decorated mosaics featured Ancient times greatly differ from handwritten, decorated manuscripts we find in the Middle Ages and crafted instruments handmade in the early modern ages.

1. メノラー

Menorah

インド

ヘブライ語で「燭台」を意味するメノラーは、信仰の場で使用される祭具である。その形状は通常7枝であり、生命の木を象徴しているといわれる。ユダヤ教の重要な祭具であると同時に、古代のモザイクや現在使用される祭具の装飾モチーフともなっている。ユダヤ教の象徴でもあり、現在のイスラエル国の紋章にも使用されている。

2. 香ショベル

Incense shovel

ローマ時代1世紀

古代、祭儀で香を焚くのに用いられた道具。ギリシア・ローマ世界でも広く用いられており、青銅製のものや土器のものもある。古代のモザイクにおける主要な装飾モチーフのひとつであった。

図版典拠：Iris Fishof, *Jewish Art Masterpieces from the Israel Museum*, Israel Museum, Jerusalem, 1994

（参考）ベトシャン出土シナゴーグのモザイク床（イスラエル博物館蔵）。左右に2本のメノラーが描かれ、中央には切妻屋根を支えた2本の大きな円柱をもった聖所が描かれ、その奥にさらにより小さい円柱をもった聖所が表されている。これはシナゴーグの建物の正面とその奥にあるトーラー聖櫃を表したものとされる。聖櫃の正面の前にはカーテン（パロケット）（資料11）がかけられている。その他、香ショベル（資料2）ショファール（資料17）も描かれている。

3. トーラーとトーラー・マントル

Torah and Torah mantle

19世紀

ヘブライ語で「教え」を意味するトーラーは、ユダヤ教の根幹ともなる最も重要な聖典である。また、キリスト教でいう旧約聖書のなかの『モーセ五書』(『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』)でもある。トーラーを包むマントルには、六角の星形が刺繍されている。この星形は古代世界において広く装飾用に用いられた。ユダヤ世界では「ダビデの星」と呼ばれ、ユダヤ教の象徴となっているが、それは近世にプラハのユダヤ共同体が旗の紋章に使用したことに由来する。現在イスラエルの国旗に使用されている。

4. ハヌキヤ

Hanukkah lamp

エルサレム、19世紀

ハヌカという祝祭で用いられる9枝の燭台である。本資料は下部に8ヵ所、上部に1ヵ所の灯心を置く口がある。中央には一対の獅子が十戒の石版を囲んでいる。十戒はモーセが神より与えられた10の戒めのことであり、獅子は十戒を守る番人、またはダビデと未来の救世主を表すともいわれる。

1章 信仰のかたち
Form of Faith

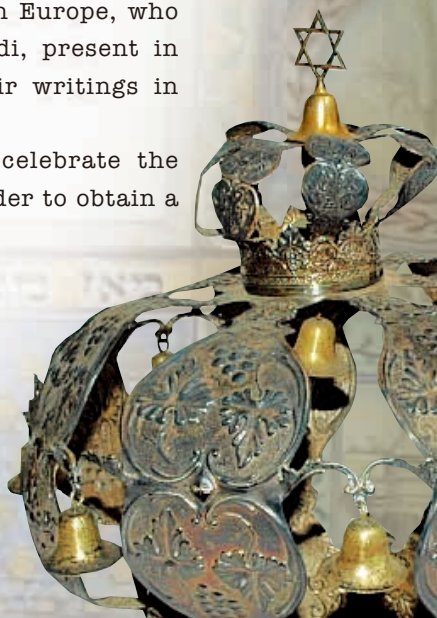
ユダヤ教の信仰の中心ともいえるのがトーラーであり、その信仰の中心の場がシナゴーグである。ユダヤ教の聖典であるトーラーには特別な尊敬が払われ、豪華な装飾がなされる。そのトーラーを保管するシナゴーグには、神聖な場としてのさまざまな調度品を見ることができる。

Playing a central role in the Jewish faith is the Torah, whereas their main place of cult is the Synagogue. The Torah, sacred scriptures of Judaism, is particularly regarded by them as holy, therefore splendidly ornamented. The Synagogue enshrining the Torah contained a number of furnishings according to its supreme worship status.

1-1 トーラーと装飾 Torah and Ornament

礼拝で用いられるトーラーは、印刷されたものではなく専門の書記によって写された羊皮紙の巻物である。ユダヤ教では、中世時代以降、トーラーに対する特別な尊敬から高価な装飾がなされてきた。その装飾には地域によって違いがみられる。その地域は大きく2つにわけられ、ドイツを中心とする東ヨーロッパのアシュケナジーと、スペインを中心とする西ヨーロッパのスファラディーがある。前者の場合トーラーは刺繍されたマントルで被われ、後者の場合は金属製または木製のケースに入れて保管される。1年かけてトーラーを読み終えたことを祝う律法感謝祭では、トーラーを抱えて行列を組んで行進する。その際に豊かな音を鳴らすために、ケースに鈴が付けられているものもある。

The Torah used in prayer was not developed by print, but it was entrusted to the expertise of designated hand-copiers. The practice of splendidly decorating it, has been in use since the Middle Ages, with differences depending on the area and group of origin, most notably the Ashkenazi, active in Germany and Eastern Europe, who covered their scrolls with an embroidered mantle, and the Shepardi, present in Spain, surrounding areas and Western Europe, who conserved their writings in wooden cases.
The Torah was brought in procession at the Simchat festival to celebrate the completion of its annual, ritual reading. A bell was attached to it in order to obtain a vivid sound during such occasions.



5. トーラーとトーラー・ケース

Torah and Torah case

トーラーの巻物をいれたケースはスファラディーのものである。木製扉にシンプルな飾りが施されている。

6. トーラー・ケース

Torah case

イラク

スファラディーの木製トーラー・ケース。トーラーの巻物を王に見立てたことから、ケースの上部が冠の形をしている。その両脇には金属製のリンモン(「ざくろ」の意味)がついている。ケースは木製の他、皮製や金属製のものもある。

トーラー巻物を開いた様子

7. トーラーとトーラー・マントル

Torah and Torah mantle

モロッコ、19世紀

19世紀に作られた大型トーラーで、羊皮紙56枚でつづられている。巻物の両端は手で持つための捲棒がつけられている。捲棒はエーツ・ハイーム(「生命の木」の意味)と呼ばれる。

(参考)イタリアの都市リヴォルノにあるシナゴーグで行われた「律法感謝祭」。トーラーを抱え、行列を組んで祝う様子が描かれている。
(ソロモン・A・ハート作、1850年)

図版典拠:E. R. カステーヨ他、市川裕監修『図説　ユダヤ人の2000年　歴史篇』同朋舎出版、1996年

8. ケテル・トーラー（冠）

Keter Torah (Crown)

ケテルは冠を意味し、トーラー巻物にかぶせるものである。冠はユダヤ教のシンボルでもある。表面には葡萄の葉、蔓、実が薄く浮き彫りされている。

9. ホーシェン（胸当て）

Tas (Torah Shield)

トーラーの巻物に取り付けられる飾り板。これは神の指示により大祭司が「胸当て」を付けるよう義務づけられたことに由来する（『出エジプト記』28：13－30、39：8－21）。また、17世紀頃からトーラーを他の巻物と区別するために始まったともいわれる。本資料には十戒と番人である2頭の獅子が彫刻されている。胸当ての下方には長方形の小さなくぼみがある。それは、巻物が使用される祝日の名称を刻んだ薄板をさしはさむためである。計3枚あり裏表に文字が刻まれている。胸当ての形状は地域によって異なり、三角の形をしたものや背面に鏡を備えたものもある。

10. ヤド

Yad (Torah pointer)

①エルサレム　②バルカン　④テルアビブ　⑤現代

トーラーを朗読するときに、朗読箇所を示すための指示棒である。また、トーラーの捲棒の上端から吊り下げられ、トーラーの装飾のひとつでもある。その形は人差し指を伸ばした握りこぶしで示される。

(参考)プラハのシナゴーグに保管されているトーラーの巻物。朗読時以外は王や大祭司の正装のように飾られる。トーラー・マントル、ケテル・トーラー、ホーシェン、ヤドが装飾として付けられている。

図版典拠：E. R. カステーヨ他、市川裕監修『図説　ユダヤ人の2000年　宗教・文化篇』同朋舎出版、1996年

11. カポレット付パロケット（トーラー・カーテン）

Parochet with caporet (Ark curtain)

モロッコ

トーラーを収容・保管する聖櫃にかけるカーテンである。聖書に記述される聖所の垂れ幕に由来する（『出エジプト記』26：31）。パロケットには、律法の冠、十戒、ユダヤを象徴する獅子、神殿を表す二本の円柱、奉納した人物名などの装飾がなされている。

十戒と番人の獅子

ケラル・トーラー

1－2　シナゴーグと祭具　Synagogue and Artifact

古代のシナゴーグはモザイクで飾られていた。時代によって造形美術の利用は異なり、中世以降には、シナゴーグの祭具や調度品を中心に宗教的な意匠が凝らされている。また、シナゴークは宗教教育の場、集会の場という共同体の活動を行う場としての役割も持っている。

The ancient synagogue used to decorate with mosaic. The use of the formative arts has varieties according to the periods. After the Middle Ages, artifacts and furnishings of the synagogue were decorated by religious designs. Moreover, the synagogue is the communal center used as a place of the Jewish religious education and meeting.

①

12.　メノラー

Menorah

①コーチン

シナゴーグに置かれる燭台。もともと聖書において幕屋や神殿のなかに置かれいていた重要な祭具用の調度品であったという。その作り方は聖書のなかで神がモーセに詳しく指示している。(『出エジプト記』25：31-38、37：17-24)

(参考)テサロニケのシナゴーグ内部の写真。中央に聖櫃があり、トーラー・カーテンがかけられている。その前にはネール・タミードが吊るされている。

図版典拠：関谷定夫『シナゴーグ　ユダヤ人の心のルーツ』リトン、2006年

開いた様子

①

13. メズーザー・ケース

Mezuzah case

①マドリード

シナゴーグやユダヤ人家庭の入り口に取り付けられる羊皮紙の巻物の容器。『申命記』のなかでモーセが、イスラエルの民に今日命ずることを心に留めておくため、「あなたの家の戸口の柱にも戸にも書き記しなさい」と指示したことに由来する習慣である。皮紙には『申命記』6章4から9節、同11章13から21節が記されている。これはユダヤ人の信仰告白とされる儀礼的祈り（シェマ）の聖句である。皮紙を丸く巻くか折って小さい窓の開いた筒に入れて戸口に取り付けた。ケースには全能者シャダイの文字や、その最初の一文字ωがみられる。

14. ツェダカ・ボックス

Tzedakah box

シナゴーグに喜捨のため置かれた容器。ユダヤ世界では同胞の貧しいものを救済する伝統がある。現在は安息日の習慣となっている。ツェダカはヘブライ語で「正義」、「施し」を意味する。木製、陶製、銀製などがあり、現在は美術工芸化したものも多い。容器には「ツェダカ」の文字が見られる。

15. テフィリン(聖句箱)

Tefillin (Phylactery)

祈りの時にユダヤの成人男子が身に付けるもの。黒い革ひもを頭と腕に巻き付け、小箱を身に固定する。頭の小箱には聖句が記された羊皮紙が収められた。この習慣は『申命記』6章8節の「これをしるしとして自らの手に結び、覚えとして額に付けなさい」からきている。

②

16. ネール・タミード

Ner tamid

②ジェルバ(チュニジア)、19世紀

常夜灯と訳され、聖櫃の前に天井から吊り下げられる。これは『レビ記』24章2から5節に由来するもので、絶えず灯が灯され、神の現臨と会衆の幸福を象徴するものである。新しいシナゴーグの献堂式にはネール・タミードに灯を灯すことが重要な儀式のひとつとなっている。ブロンズ製やガラス製のものもある。

2章 彩られた祝祭と儀礼
Decorated Festivals and Rituals

ユダヤにはさまざまな祝祭や通過儀礼がある。聖書に由来する祝祭や儀礼で使用される祭具は、神聖なものであり、宗教的意匠を凝らした装飾がなされている。さまざまな地域や時代の祭具を紹介することにより、ジュダイカの多様性が浮き彫りとなる。

Judaism is characterised by a variety of festivals and rites of passage, based on the worship of ritual artifacts used in celebration, and decorated holy relics. Presenting a wide diversity according to period and location, these works highlight the diverse aspects of the Jewish culture.

2－1　祝祭と祭具　Festival and Artifact

新年が秋に始まるユダヤの暦にしたがって、月々にさまざまな祝祭がある。聖書に由来する祝祭の他に、エルサレム神殿の破壊や追放の哀悼、さらには近代の歴史の出来事に由来する記念日もある。なかにはもともと収穫祭的性格を持っていたものが、歴史的出来事と結びつき、民族解放を記念する祝祭へと変貌しているものもある。ここではその一部ースコット、ハヌカ、プリム、ペサハを紹介する。

According to a Jewish calendar, various festivals are held in Judaism each month. These festivals derive from the descriptions of the Bible, the condolence on the destruction of Jerusalem Temple and the Exile, or the modern historical events. Furhermore, tied with historical affairs, some changed from a harvest festival to the festival commemorated national liberation. At this section we show specifically four festivals : Sukkot, Hanukkah, Purim, Passover.

17.　ショファール（角笛）

Shofar (Ram's horn)

儀礼的に清浄とされる動物の角笛。新年の第一日目や祝祭の始まりに吹かれる。また、救世主到来の日を示すシンボルでもある。古代のモザイクではメノラーなどと共に描かれていた。通常、雄羊の角で作られる。

ユダヤ暦と祝祭

ユダヤ暦は秋に新年が始まる。太陽暦とバランスをとるため、1年13ヵ月の閏年を19年に7回設けて調節される。祝祭はおおまかに3つ－聖書に守るべく記載されているもの、聖書の出来事などに由来するもの、近代の歴史の出来事に由来する記念日に分類される。

季節	ユダヤ暦	西暦	祝祭の名称	内容
秋	ティシュレー	9 ～10月	ローシュ・ハシャナ	新年
			ヨム・キプール	贖罪日
			スコット	仮庵祭
			シムハット・トーラー	律法の祝典
	マルヘシュバン	10～11月		
冬	キスレブ	11～12月	ハヌカ	神殿奉献祭
	ティベット	12～ 1月		
	シュバット	1 ～ 2月		
	アダル	2 ～ 3月	プリム	エステル記の祭り
春	ニサン	3 ～ 4月	ペサハ	過越祭
			ヨム・ハアッツマウート	独立記念日
			ヨム・エルシャライム	エルサレム解放記念日
	イヤール	4 ～ 5月	ラグ・バオーメル	オーメルの33日目
	シバン	5 ～ 6月	シャブオット	7週の祭り
	タムーズ	6 ～ 7月		
夏	アヴ	7 ～ 8月	ティシャ・ベアヴ	アヴの月の9日（神殿崩壊記念日）
	エルール	8 ～ 9月		

スコット
Sukkot（仮庵祭）

そのはじまりは秋の収穫を祝うものである。聖書には農作物の収穫を祝って、仮の庵に7日の間住まねばならないと記されている（『レビ記』23：39）。また、イスラエルの民が約束の地に到着する前の放浪時代に仮庵に住んでいたことから、放浪の時代を記念するものであるともいわれている。祭りでは、シナゴーグで祈りを唱えながら4種類の植物－エトログ（シトロンの実）、ルーラヴ（シュロの枝）をミルトスとヤナギの枝を束にして持ち、朗読台の周りを巡る。家庭では、庭やベランダに仮庵（スカー）を作り、7日の間そのなかで食事をしたりして過ごす。

①

③

18. エトログ容器

Etrog container

①19世紀　③アメリカ、1987年

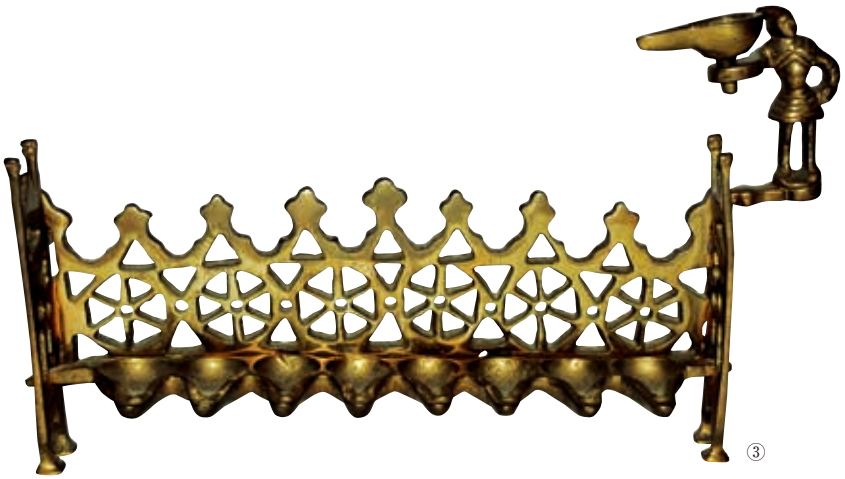
スコット祭で使用されるエトログを入れる容器。エトログはレモンに似た柑橘類の一種である。古代から親しまれたユダヤ教のシンボルとして、シナゴークや記念碑などに刻まれている。祝祭の期間にエトログを保護するために、伝統的には長方形で果物の形をしている容器に入れていた。現在はさまざまな形があり、シンプルなものから豪華な装飾を施したものもある。本資料のなかにはイスラエル各地の聖蹟が彫刻され、蓋の周囲には『レビ記』23章40節が記されているものもある。

ハヌカ
Hanukka（神殿奉献祭）

神殿の奪還・奉納を祝い、記念する祭りである。紀元前2世紀にシリアのセレウコス朝の支配下、ユダヤ教が弾圧されマカバイ戦争が勃発。紀元前165年にユダヤ人が勝利し、エルサレム神殿を潔めてふたたび神に奉納したことを記念する。ハヌキヤ・ランプの8枝に、一日に一枝ずつ灯りを灯していく。それは神殿を奪還した際に、一日分の油で8日間燃え続いたという奇跡に由来する。

①

②


③

19. ハヌキヤ

Hanukkah lamp

①ポーランド、18世紀　②19世紀　③ポーランド

神殿奉献祭で用いられる9枝の燭台。燭台がマカバイ戦争の時に8日間燃え続いたという奇跡を記念して、8枝と点火用の受け皿とをあわせて、通常9枝からなる。一般的に聖櫃の右側（南側）に置かれる。現在、ハヌキヤのデザインは多様化している。メノラーの形がよく用いられ、イスラムではアーチ型・扇形・ドーム型、ヨーロッパでは背が高いものが多く、ドイツでは三角形が流行した。

20. 大型ハヌキヤ

Large hanukkah lamp

ダマスカス

十戒と番人の獅子

プリム
Purim（エステル祭）

紀元前5世紀中頃に起こった事件、アハシュエロス王治下のペルシア王国でユダヤ人が敵から救われたことを記念する。この物語は『エステル記』として聖書記載されている。プリムは「くじ」を意味し、ユダヤ人の根絶を企てたハマンがくじを引いて実行日を決めたことに由来する。祭りは、シナゴーグで『エステル記』などを朗読する。カーニバル的なもので子どもたちは仮装しお菓子がやり取りされるなど、ユダヤの祝祭のなかでも最も陽気な祭りである。

①　②

21. メギラー

Megillah

①イスタンブール、19世紀　②モロッコ、18世紀

エステル祭で朗読される巻物。『エステル記』、もしくは『雅歌』『ルツ記』『哀歌』『コリントの言葉』の5書のいずれかが記された。トーラーよりは小型で、巻軸も1本だけである。

①

②

22. グラッガー（ノイズメーカー）

Grager (Noise maker)

①ポーランド、19世紀　②エルサレム、20世紀

エステル祭の時に用いられる道具。シナゴーグで『エステル記』が朗読され、ユダヤ人の敵ハマンの名が読み上げられるたびに子供たちが音を立てて彼の名を打ち消すために鳴らされる。

ペサハ
Pesach（過越祭）

もともと春の到来を祝う祭りが、後に『出エジプト記』の物語と結び付けられて民族解放の祭りとなったといわれる。祭りは8日間行われ、ペサハの最初の日に一族が集まりセデルという宴をひらく。出エジプトの物語が中心となった「ハガダー」という式文を朗読しながら進行され、全員で歌ったりもする。また、聖書には「種を入れないパンの祭り」（『出エジプト記』12：17）とも記されていることから、除酵祭とも称される。

23. サラエボ・ハガダー（複製）

Sarajevo hagaddah (replica)

旧ユーゴスラビア

ハガダーは物語を意味し、過越祭の宴で朗読されるものである。その内容は、聖書、口伝の律法、ユダヤの歴史を伝える詩文などで構成されている。本資料のオリジナルはスペインで14世紀に制作されたもので、現存するもっとも古い資料のひとつである。写本装飾は中世で流行し、当時のヨーロッパ各地域の様式が反映された豪華なハガダーもある。聖書の場面などが挿絵として表されている。

24. セデル皿

Seder plate

イラン、19世紀

過越祭の宴セデルで使用される特別な皿。ユダヤの歴史を象徴する食物をのせる。種無しパン、羊の前脚、ゆで卵、野菜、苦菜、果物のおろし汁と砕いたクルミの混ぜ合わせなどである。苦菜はエジプトでの奴隷生活の過酷さを、羊の前脚は神殿で生け贄にされた子羊を象徴する。果物とクルミのペーストはエジプト王の都市建設のために強制されたレンガ造りの漆喰を象徴するといわれている。
中央の文字はヘブライ語でペサハ（「過越祭」の意味）と記されている。セデル皿はイタリアではマヨリカ陶器製、ドイツでは白鑞製などがある。

2－2　通過儀礼と祭具　Rite of Passage and Artifact

ユダヤの成人として成長していくなかで、割礼、成人式、結婚式は重要な通過儀礼である。その際に使用される祭具は、共同体や一族のなかで代々受け継がれているものもある。また、重要な儀式を彩るために豊かな装飾が施され、しばしば個人の豊かさを反映したものとなった。

The Jews have important rites of passage, that is circumcision, coming-of-age ceremony and marriage, through which they are growing up as a member. Ritual artifacts used in these ceremonies have been maintained in family or community. Ornamented richly to celebrate important rituals, the artifact often reflects the personal wealth.

25. キッセー・エリヤフー（エリヤの椅子）

Elijah's chair

アブラハムは神に従い割礼の義務を定めた（『創世記』17章）。男児は生まれて8日目に割礼を受けなければならない。男児は割礼の手術前に、預言者エリヤの現臨を象徴する椅子にのせられる。地域によっては、小さく製作した椅子をシナゴーグの壁の高い位置に飾る。

26.　割礼器具

Instruments of circumcision

モロッコ

小刀は男根の包皮を切るため、包皮つまみは性器本体を傷つけないためのものである。血受け皿には、「8日目に未割礼の肉に割礼を施さなければならない」という創世記の句が銘記されている。本資料は全て銀製である。

「イサクの犠牲」

神はアブラハムの信仰を試すために息子イサクを生贄に捧げるよう命じた。殺す直前に天使が止めに入り、「神はあなたが神を恐れる者であることが分かった」と伝えた。キリスト教絵画においても頻繁に描かれた主題である。

27. 割礼式用キドゥシュ・カップ(コス・ハブラハ)

Child's kiddush cup

割礼式用のぶどう酒カップ。手術中に子供の痛みを和らげるために、ぶどう酒を割礼用カップで飲ませる。割礼式に使う祭具は、割礼式に関係ある諸場面で飾られる。本資料には、アブラハムの生涯の一場面「イサクの犠牲」(『創世記』22：1-19)が表されている。

28. ヴィンペル(トーラー・バインダー)

Winpel (Torah binder)

ドイツ、1931年

割礼式で割礼執刀者(モヘル)によって手術中の赤ん坊を保護するためにその身体に巻き付けたものである。木綿または麻で作られ、絵やヘブライ語の銘文が刺繍された。銘文には子供や父親の名、立派なユダヤ人として成長するよう祈願の言葉などが記される。通常、シナゴーグで保管される。

29. 成人式用キドゥシュ・カップ

Kiddush cup of Bar Mitzvah

成人式用のぶどう酒カップ。成人式はヘブライ語でバル・ミツヴァといい、「義務を負う人」、もしくは「掟の子」を意味する。ユダヤ人男子は13歳で成人式を行い、肩衣とテフィリンを身につけてシナゴーグに入り、トーラーを朗読する。

開いた様子

31. 結婚式用指輪

Wedding ring

新婦の指にはめる結婚指輪。シナゴーグの備品であるか、時にはユダヤ家庭のなかで受け継がれているものもある。これはリング台座側面の一方にマザール、他方にトーヴというヘブライ語(「おめでとう」の意味)が浮き彫りにされており、その上部表面にはエレミヤ書7章34節「花婿と花嫁の声」、裏面には「喜びと祝福の声」の句が浮き彫りとされている。そして最上部は蓋になっており、それを開けるとスパイスを入れる仕組みになっている。神殿と未来の家庭を象徴する小さな建物の飾りがついている。特に16～19世紀のイタリアやドイツでは、華麗な装飾がほどこされた。

②

③

30. ケトゥバー（結婚契約書）

Ketubbah (Marriage contract)

②イスファハン、1860年（複製）
③ローマ、1787年（複製）

結婚式で署名する契約書。契約書には離婚する場合の女性側に支払う金額などが書き込まれているが、現在は金額の数字には実質的な意味はないという。契約書は、祝いの場に似つかわしく美しく飾られるようになった。特にイタリアでは、同地の美術の様式を反映したものが製作された。

3章 安息日の祈り
Prayer of Shabbath

ユダヤ教において毎週土曜日は一切の労働が禁じられる安息日である。それは聖書の記述「安息日にはどんな仕事もしてはならない」(『出エジプト記』20:10)に由来する。安息日は毎週めぐってくる聖日であり、ユダヤ人の信仰生活の基本といえる。安息日には、シナゴーグで祈りを捧げ、家庭で聖日を祝う。それぞれの場で儀式に使用されるさまざまな祭器から、安息日の様子をうかがうことができる。

Being Saturday the Jewish Sabbath, the Jews are prohibited from performing any labor on this day, as the Bible states:"...but the seventh day is the Sabbath to Yahweh your God. Thou shalt not do any work in it..." (Exodus 20 : 10). The Sabbath is the holy day in the weekly cycle, and it is at the base of the Jewish religious life. On the Sabbath, the Jew's offer prayers to God in the synagogue and celebrate holy day in their house. We can be acquainted to the forms it took over the years by examining the various implements and ritual objects in use at different locations.

32. シャバット・ランプ

Shabbath lamp

ツファト（ガリラヤ）、19世紀

安息日が始まる前、金曜日の夕方に家庭で灯すランプである。安息日に入ると、火をつけることを含めて一切の労働が禁じられる。本資料は19世紀に作られたブロンズ製のものである。中央にはヘブライ語で安息日を意味する「シャバット」の文字が表されている。その文字の上部と下部にある12個の装飾は、イスラエル12部族のエンブレムだと推測される。

①

33. 安息日用吊りランプ

Hanging shabbath lamp

①ドイツ、19世紀

安息日に吊り下げられるランプ。ドイツで星の形をしたものが流行し、ドイツ語のJudenstern（「ユダヤの星」の意味）という名で16世紀から知られている。その特徴は、中央のオイル受け口といくつもの噴出口がある点である。噴出口の数はさまざまなであり、6～12までと幅広い。真鍮製、白鑞製、銀製などがある。ドイツは噴出口が長いものが多いが、イタリアでは短いものが多く制作された。

①

34. スパイス・タワー

Spice tower

①東欧

安息日の最後にスパイス(香料)をくゆらす儀式がある。これは安息日がいかにかぐわしく快い一日であったかを追想することを象徴するものである。スパイスの芳香を吸い込む間に特別な祝福の言葉が唱えられる。スパイスには通常ミルトスの葉が使われる。容器は職人によってさまざまな工夫が凝らされ、塔や花などの形を真似たものもある。

①

35. キドゥシュ・カップ

Kiddush cup

①現代

安息日に飲むぶどう酒容器。飲む際にキドゥシュ(「聖別」の意味)という祝福の祈りを唱える。この容器は安息日以外の祝祭、例えば過越祭でも用いられる。カップには葡萄や花の意匠があしらわれる。しばしば所有者の名前やヘブライ語の言葉が刻まれる。

36. シャバット・クロス

Shabbath cloth

シナゴーグの講壇の上に敷かれるもの。「安息日を覚えて聖とせよ」の句が刺繍されている。(『出エジプト記』20：8)

終章 ともし火の系譜－聖書考古学

Genealogy of Light : Biblical Archaeology

イスラエルを含む中近東の古代都市の遺跡から、多くのランプが発掘されている。ランプは古代の人々にとって日常品であり、儀礼でも使用された。形は時代と場所によってさまざまであり、メノラーなどの装飾を施しているものもある。ここに、古代から受け継がれてきた、信仰、祝祭、儀礼のなかで使用されるさまざまなランプの原型を知ることができる。

Many lamps are excavated from the remains of the Middle East's ancient cities including Israel. Lamps were daily necessities and used in their rites for ancient people. Those form varis from age to age, place to place, so there is a decorated menorah. Hence, we grasp the situation of the origin of lamps which inherited since Ancient times and were used of faith, festival and rite.

37. 平皿型ランプ

Flat plate type oil lamp

中期カナン時代
B.C.3100 ～ B.C.1850

最古期の陶製ランプは前3000年のもので、平たい皿の形をしている。芯をそのふちのひとつに挟み、灯りをともす。前2000年頃の中期カナン時代のものはふちが4つに分かれていて、その各々に芯を挟むようになっている。

38. 深底平皿型ランプ

Deep flat plate type oil lamp

中期青銅器時代
B.C.1850 ～ B.C.1550

39. 浅底平皿型ランプ

Shallow flat plate type oil lamp

鉄器時代、イスラエル時代
B.C.1200 ～ B.C.930

40. 台付平皿型ランプ

Flat plate type oil lamp with a stand

B.C.1000 ～ B.C.600

平らな形状をした皿のものから、台座をつけて安定させるために円盤形の台が付けられているものもある。

41. ノズル付小型ランプ

Small oil lamp with nozzle

ヘレニズム時代
B.C.330 ～ B.C.63

芯口がひとつになると、ノズルの部分を延ばしたランプが作られるようになる。

42. 小型ランプ

Small oil lamp

ハスモン時代
B.C.2世紀～ B.C.1世紀

胴の左右を接合しただけのシンプルなデザインで、ランプの芯口はひとつである。

43. ランプ

Oil lamp

ヘロデ時代
B.C.37 ～ A.D.135

胴の中央に穴を開け、芯口が長いノズルのランプである。胴の円の周囲にはデザインを施していないシンプルなランプである。

44. 装飾付ランプ

Oil lamp with ornament

ヘロデ時代
B.C.70 ～ A.D.150

胴に円い注油口を設け、端に把手をつけたもの。胴の表面には装飾が見られる。

45. 装飾付ユダヤ・ランプ

Jewish oil lamp with ornament

2世紀～ 4世紀

植物文様の装飾がみられ、ユダヤ教でよく見られるデザインである。

46. メノラー装飾付ユダヤ・ランプ

Jewish oil lamp with Menorah ornament

ビザンチン時代
4世紀～5世紀

ローマ時代のランプの胴は円形のものが多かったが、ビザンチン時代のランプは卵形になった。これは卵形の胴に装飾を施したランプである。

47. 魚尾型把手付平型ユダヤ・ランプ

Jewish oil lamp with fish type handle

タルムード時代
3世紀～5世紀

芯の受け口が7個あり、メノラーをモチーフにしている。

ジュダイカの多様性とその背景
－ケトゥバーを例に

西南学院大学博物館　学芸研究員
内島　美奈子

はじめに

かつてユダヤ民族は祖国イスラエルの地を追われ、その後さまざまな地域での追放により移住を繰り返した。そのなかで、ユダヤ教徒たちは信仰によりそのアイデンティティを保ち、教義にもとづいた様々な祝祭や儀礼により共同体を維持していた。ジュダイカ[1]はそのようなユダヤ教の祝祭や儀礼で使用されるものである[2]。

ジュダイカは、移住先である他宗教圏の美術の影響を受けているとされる。そのことは、繰り返される移住の歴史のなかで、ユダヤの人々が必ずしも隔絶され閉じた世界にいたのではないことを教えてくれる。

そこで本論では、ユダヤと移住先における係わり合いについて考察したい。具体的には、主な移住先であるキリスト教圏の美術の反映を、ジュダイカのひとつ、ケトゥバーの装飾に見ていく。二次元平面に表された結婚契約書であるケトゥバーの装飾は、ジュダイカのなかでもキリスト教美術の反映を指摘されるものである。ユダヤの慣習とキリスト教圏の美術がどのような係わり合いを持つのか考察し、その係わり合いによって形成されたジュダイカの多様性を明らかとすることが本論の目的である。

1. ユダヤの歴史－キリスト教圏への移住と追放

紀元前8世紀に始まるディアスポラ[3]により、ユダヤのひとびとは世界各地に拡散していった。世界各地への拡散は、長い歴史のなかで自発的な移住もあったが、度重なる追放と移住の結果による。ローマ皇帝時代から中世初期にかけて、スペインに多くのユダヤ人が定住し、そこから遠隔地交易の発展によってヨーロッパの南、西、中部へと広がっていった[4]。また、中世後期、近世においてドイツ地域に多くのユダヤ人が定住した。そのなか、1492年にイベリア半島からの追放があり、イタリア、北アフリカ、オスマン帝国へと多くのユダヤ人が移住、15～16世紀にはドイツで多くのユダヤ人が追放され東ヨーロッパ世界に拡散していった。

このディアスポラの歴史のなかで、中世から近世初期までキリスト教圏に住むユダヤ人たちはある程度の自由を得ていた。イタリアではロンバルディアの諸都市において金融業者として活躍し、14世紀の宮廷では有力なユダヤ人たちが特権を与えられた[5]。ある時期に、ユダヤ人を区別するため帽子や紋章の着用が義務づけられたが、それだけキリスト教徒とユダヤ教徒の区別が難しかったことを示している。ユダヤのひとびとを取り巻く環境が徐々に厳しいものとなったのは、14世紀頃からのことである。托鉢修道会を中心に反ユダヤの動きが生まれ、高利貸しや徴税請負によってキリスト教徒を収奪する、非道なユダヤ人というイメージが作り上げられ浸透していった。16世紀の宗教改革の時期には、その異端の原因をユダヤ人に帰する動きが一部生じるなど、立場をさらに悪化させた。1569年にピウス5世はイタリアの教皇領からユダヤ人を追放し、ローマおよびアンコーナだけに居住を許した[6]。16世紀にはユダヤ人が住む地区（ゲットー）が定められ居住地が制限された。ただし、イタリアの各地で形成されたゲットーのなかには、その内部で文学、芸術、伝統的学問が栄え続けたところもある[7]。

以上のように、ユダヤ教徒とキリスト教徒は比較的共存していた時期があった。また、ゲットー成立後にも、両者の接触が失われたわけではなかった。これからケトゥバーの例で示すように、ジュダイカはそのような状況を示す資料ともなる。

2. ケトゥバーとは

現在のユダヤ美術の研究は19世紀末に始まり、古代のモザイクの発見[8]（1928年）、イスラエル国家の誕生（1948年）などを契機に、近年その研究は増えてきている[9]。また、ジュダイカを蒐集し展示する博物館が世界的に増えてきている。しかし、世界中に離散したユダヤの美術は、一般的に美術史研究で扱われるような、明確な領土のなかで隆盛した美術とは極めて異なる状況である[10]。そこで『ユダヤ美術とユダヤ研究』のなかでグットマンは次のよ

うに述べている。「ユダヤ美術研究において、ユダヤ側と移住先の非ユダヤ人社会の美術や慣習との複雑な係わり合いを、ユダヤ美術のなかに見分ける必要がある」[11]。つまり、ここではキリスト教圏の美術とユダヤの慣習との係わり合いを、ケトゥバーにみていかなければならない。

今回取り上げるケトゥバーは、近年において研究書が多数出版されるなど、ジュダイカのなかでも盛んに研究がおこなわれているものである。そのなかで、サバーの研究は注目すべきであり、ヘブライ・ユニオン・カレッジ[12]が多数所蔵するケトゥバーのカタログを出版した。それはケトゥバーを世界の範囲で考察した最初の主要なカタログとされる[13]。ではそのような研究成果を参考にしながら、ケトゥバーについてみていきたい。

ケトゥバーが使用される結婚式は、ユダヤのなかで重要な通過儀礼のひとつである[14]。結婚の儀式は前半と後半で構成され、まず「エルシン」(「キドゥシン」)と呼ばれる婚約の儀式、その後「ニスイン」と呼ばれる結婚の儀式がある。一般的に、前半の婚約の儀式において事前に用意した結婚の契約書としてケトゥバーに署名がなされる。署名が終わると、ラビ(ユダヤ教の宗教的指導者)はケトゥバーを読みあげ、花婿は花嫁にケトゥバーを手渡す。声に出してケトゥバーを読み上げるという習慣は、12世紀ごろのフランス、ドイツのユダヤ人共同体や、イスラエルなどで見られた[15]。その後、二部構成の結婚の儀式は他のヨーロッパ地域にも広まった。観客に向かって高々と示されるケトゥバーは、結婚の儀式において注目されるものとなった。

次にケトゥバーの契約書としての内容を確認しておこう。証書作成の曜日や日付、場所、結婚した夫婦およびその父親たちの名前、さらには花嫁が初婚か未亡人か離婚暦があるかどうかといった項目を含み、その後に続いて夫の経済的義務について書かれている。ここには女性に経済的保証を与え男性の離婚を困難にするという目的がある。結婚契約書がいつから存在したかは明らかではないが、アラム語で書かれた紀元前5世紀のものが発見されている。中世には、今日使われるような定型文が確立していたという。

結婚契約書に装飾がほどこされたのは、ケトゥバーの現存例から10世紀から12世紀頃からだと推測される[16]。当初の装飾は写本装飾のそれと類似し、建築や草花の文様がほどこされた。西ヨーロッパでは、オスマン帝国諸国、北アフリカでもケトゥバーの装飾が流行した。そのなかでも、ケトゥバー装飾において最も重要なのは、17世紀から18世紀のイタリアである。同地でこの時期に、豪華な装飾が施された多くのケトゥバーが制作された。

3. 17 ～ 18世紀イタリアのケトゥバー装飾

17 ～ 18世紀のイタリアでケトゥバーの装飾が流行した理由について、サバーは次の点を指摘する。まず、ケトゥバーを装飾していたスペイン系のセファラディーが1492年以降にイタリアに多く移住してきたことがあげられる。とくに、ヴェネツィアにも彼らは多く移住し、商業的に大きな成功を収めていた。彼らの富を示す機会として、結婚式は重要なものであり、ケトゥバーに反映されたと指摘される[17]。これはヴェネツィアでは多数の初期ケトゥバーが作られていることからもうかがえる[18]。その後、イタリアの主要な都市でも作られるようになった。そして、ケトゥバーを人前で高々と示し朗読するという習慣が、人目を引くための豪華な装飾をうながしたとされる[19]。この習慣はイタリアでは16世紀の後半まで一般的ではなかったが、ユダヤの移民が増加してきたことにより、次第に浸透していった[20]。さらに、当時のイタリアのバロック芸術およびロココ芸術の隆盛が、豊かな装飾をさせたともサバーは指摘する。

ではケトゥバーを見ていこう。ケトゥバーの多くは長方形であり、地域によって羊皮紙であったり紙であったり、定型化された条項などに多少の違いが見られるものの、その形態は大きく違わない。イタリアのケトゥバーも長方形の羊皮紙に描かれており、特徴としては上部の頂上部分、もしくは下部の先端部分がドーム、もしくは扇状になっていたり、輪郭部分が装飾されていたりする点である。

次に、キリスト教圏におけるケトゥバーの作例が同地の美術に影響を受けている点をみていきたい[21]。サバーはケトゥバーのモチーフを5つ－①門のモチーフ②聖なる都市と神殿の描写③新郎新婦の描写④国家の紋章⑤草花や動物のモチーフに分類している[22]。このなかで、キリスト教圏では②と③が主に制作された。

上記分類のうち、②に分類される都市の描写、そのなかでもエルサレムの描写は、キリスト教絵画でも頻繁に見られるものである。それは、聖なる都市の象徴として、あるいはイエス・キリストの生涯が祭壇などに描かれる時、その生涯の舞台として表された。18世紀にパドヴァで制作されたケトゥバーには、中央に8角形の神殿、いわゆる岩のドームに類似した建物を中心とした都市が描かれており、エルサレムを表していると思われる(図1)。また、キリスト教建築の内部、もしくは外壁の装飾との類似するモチーフが指摘され、キリスト教絵画においてもよく描き込まれるものである。(図2、3)。

そして、イタリアにおけるケトゥバーの装飾の特徴として、人物像や説話が描かれた点があげられる[23]。サバーはチェーザレ・リーパ(c.1555-1622)による『イコノロギア』からの寓意像の引用を指摘している(図4)[24]。この書は、イタリアでは版を重ねて出版され、他国でも翻訳され、17 ～ 18世紀のヨーロッパにまでその影響力を及ぼした

図1
複製　（オリジナルは羊皮紙、パドヴァ、1732年、イスラエル博物館所蔵）

図2
羊皮紙、ルーゴ、1821年、イスラエル博物館所蔵

図3
羊皮紙、トリノ、1731年、ヘブライ・ユニオン・カレッジ・スカーボール博物館所蔵

図4
部分（羊皮紙、ローマ、1813年）ヘブライ・ユニオン・カレッジ・スカーボール博物館所蔵

図5
部分（羊皮紙、ピサ、1790年）ヘブライ・ユニオン・カレッジ・スカーボール博物館所蔵

ものである。また、イタリア・ルネサンス期以来好まれる神話的主題を描いている例もある。18世紀末にピサで作られた例では横たわるヴィーナスとクピドの神話的主題が挿入されている（図5）[25]。

以上みたように、イタリアで制作されたケトゥバーには、キリスト教美術が反映されたことが明らかである。ただし、作例をみていくと、17世紀や18世紀のバロック、ロココ美術という、当時流行した美術を着想源としているというよりは、キリスト教美術の伝統的なモチーフを借用しているように思われる。

この点には装飾をした人物についての問題がある。サバーが指摘するように、ユダヤの家庭に置かれた調度品を非ユダヤの職人に依頼していた[26]。彼らに依頼していた家庭の居住空間の調度品－キャビネット、鏡、つぼなどの装飾には、同地の美術が反映されており、宗教的な象徴が日常品に描かれていたのである。よって一般的にキリスト教の教会や邸宅に飾られた祭壇画を当時のユダヤ人たちが目にすることは難しかったであろうが、身近な生活のなかで知ることができた[27]。ランズベルガーが指摘するように、ケトゥバーの装飾はユダヤ人やユダヤ

人以外の職人も手がけていたとされ、家具装飾を手がけた職人やもしくはそれをユダヤの職人が模倣した可能性もあると思われる[28]。

ともあれ、ケトゥバーの装飾の目的は婚礼の場を華やかに彩るために、豪華に飾ることであった。よって、その装飾にはイタリアのバロック、およびロココの美術様式という当時の流行に関係なく、同地の美術を自由に取り入れ調和させたといえるだろう。

おわりに

以上、ユダヤの歴史をふまえたうえで、ケトゥバー装飾とその発展についてみてきた。時代によってさまざまな地域に移住したユダヤのひとびとにとって、移住先の美術に影響を受けることは自然であったと推測される。そこから生み出されたジュダイカは彼ら独自の新しい美術であるといえよう。そして、移住先や時代により、異なるそれぞれのかたちを持ったジュダイカが存在し、その多様性が生み出されている。

［註］

1 ジュダイカ(Judaica)は日本語でユダイカとも訳される。ユダヤの美術を含む、ユダヤ文物全般をさす。近代初期から学術文献のなかで普及している集合概念である。ユーリウス・H・シェプス『ユダヤ小百科』石田基広他訳、水声社、2012年を参照。
2 Abram Kanof , *Jewish ceremonial art and religious observance*, New York, Abrams,1970を主に参照。
3 ディアスポラとはイスラエルの地の外で生きることを指し、歴史的には強制的なものと自発的なものとで区別される。その起源は、紀元前722年の北イスラエル王国の滅亡や紀元前597－6年のバビロン捕囚に遡る。長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館、2008年、319頁：「ディアスポラ」『ユダヤ小事典』659－660頁参照。
4 関哲行『スペインのユダヤ人』山川出版、2003年、51－95頁。
5 ウルビーノ、ローマ、ナポリ、マントヴァ、ミラノなどがあげられる。河原温『都市の創造力』岩波書店、2009年、224頁を参照。
6 エレーナ・ローメロ・カステーヨ、ウリエル・マシーアス・カポーン『図説　ユダヤ人の2000年　歴史篇』那岐一尭訳、市川裕監修、1995年、138頁。
7 同掲書、140－141頁。
8 ベト・アルファ(パレスチナ)の紀元前6世紀のシナゴーグのモザイクの発見などがあげられる。
9 美術史におけるユダヤ美術研究については以下を参照。圀府寺司「封印を解く――今なぜ「美術史とユダヤ」か」『西洋美術研究　No.4 美術史とユダヤ』三元社、2000年、4－11頁：グットマン、前掲書、133－145頁。また、同書の巻末に付された「文献リストと解題」も参照。
10 圀府寺司「書評Richard I. Cohen, Jewish Icons：Art and Sosiety in Modern Europe、Kalman P. Bland, The Artless Jew：Medieval and Modern Affirmations and Donials of the Visual」『西洋美術研究 No.6　イコノクラスム』三元社、2001年、167－170頁。
11 ジョゼフ・グットマン「ユダヤ美術とユダヤ研究」『西洋美術研究　No.4 美術史とユダヤ』吉松実花訳、三元社、2000年、135頁。
12 アメリカにある機関。正式にはHebrew Union College－Jewish Institute of Religion。
13 Shalon Sabar, *Ketubbah : Jewish marriage contracts of Hebrew union college Skirball museum and Klau library,* 1990, The Jewish Publication Society, Philadelphia, New York.
14 結婚の儀式とケトゥバーについては、吉見崇一『ユダヤの祭りと通過儀礼』リトン、1994年、176－182頁：Richard I. Cohen, *Jewish Icons：Art and Sosiety in Modern Europe*, 1998, University of California press, Berkeley, 1998, pp.68－113を参照。
15 Shalon Sabar, The beginnings of *Ketubbah* decoration in Italy : Venice in the late sixteenth to the early seventeenth centuries, in *Jewish Art,* 1986－7, p.99.
16 Shalom Sabar, *Ketubbah : the art of the Jewish marriage contract*, The Israel Museum, Jerusalem, Rizzoli, New York,1993, pp.9－15.
17 *Ibid,* pp.104－106.
18 Sabar, *op. cit.*, 1986－7, pp. 100－101.
19 Sabar, *op. cit.*, 1993, p.19.
20 Sabar, *op. cit.,* 1986－7, pp.98－99.
21 Shalon sabar , "The Use and Meaning of Christian Motifs in Illustrations of Je wish Marriage Contracts in Italy", in *Journal of Jewish art,* , Vol.10, Spertus College of Judaica Press, 1984, pp.47-63.
22 註15で参照した 著作で、サバーは5つの分類を各章ごとに論じている。
23 Sabar, *op. cit.*, 1990, p.13.
24 『図像学』と訳されるエンブレム・ブックである。初版は1593年にローマで出版された。徳・感情・学問などの抽象的概念を寓意で表現したものをまとめたものである。サバーはリーパの1611年のパドヴァで出版されたものを着想源として指摘している。半裸の女性は、「慈善心Benignity」、白鳥を抱える若者は「吉兆Good Omen」だとされる。*Ibid,* p.150-151.
25 *Ibid,* p.134－137.
26 *Ibid.* p.13.
27 *Ibid,* p.13.
28 Franz Landsberger, "Illuminated Marriage Contracts with Special Reference to the Cincinnati Ketubahs", in *Hebrew Union College Annual,* Hebrew Union College － Jewish Institute of Religion, Vol. 26, 1955, pp. 503－542.

図版典拠

1 関谷定夫氏コレクション。筆者撮影。
2 Sabar, *op. cit.*, 1993 p.65.
3～5 Sabar, *op. cit.*, 1990, pp.179, 150, 134.

宗教の展示事例
－ベルリンのユダヤ博物館－

西南学院大学博物館　学芸員
安髙　啓明

はじめに

特定宗教をテーマに取り上げた博物館は、国内外をみても多いとはいえない。靖国神社遊就館や天理参考館などといった、大規模な施設がある一方で、公立博物館では政教分類の概念のもと設置を困難としている。ましてや、ユダヤ教を取り上げた展示をしている博物館というと、日本国内では少数派であろう。

西南学院大学博物館では、キリスト教の起源というトピックで若干のユダヤ教関連資料を展示し、特別展としてユダヤの美術工芸品を中心とした“ジュダイカ・コレクション”展を開催している。ジュダイカ・コレクション展は、2014年度秋季特別展で3回目となるが、本学名誉教授関谷定夫氏のご協力を得て開催したものである。過去には、イスラエル大使が来館されるなど、本学博物館とユダヤ教展示は開館以来、密接な関係にある。それは、西南学院大学がキリスト教主義の学校法人かつ、私立であること、そして大学博物館という性格上、広域・多分野の学術標本を有しているからで、これを展示に反映するという取り組みを可能としているのである。

そこで、本稿では、宗教を展示するとはどういうことかを考えるにあたって、ユダヤ教資料の展示から考察していく。このなかで、ユダヤ教に馴染みが浅い日本、そして由縁のあるドイツの両国間におけるユダヤ教博物館において、宗教教育を展示というツールを用いてどのように取り組んでいるのかを検証する。なお、本論執筆にあたっては、2014年6月に訪れた調査をもとにしていることを付記しておく。

1. 日本におけるユダヤ教展示　－聖書考古学資料館－

国内でユダヤに関連する展示をおこなっている施設に、聖書考古学資料館（東京都千代田区駿河台）がある。ＪＲお茶の水駅から徒歩1～2分という立地にあり、ユダヤに特化した展示というよりは、「古代オリエントや地中海世界の聖書に関連する考古学資料」を、約100点収集しており、これを展示している。本学特別展でも出品している陶製ランプをはじめ、古代コインやメシャ碑文（複製）などもあり、小さい空間ながらも工夫した興味深い展示をおこなっている。

聖書考古学資料館では、講演会やセミナーも実施されており、イスラエルならびに聖書に関する理解を深めさせる教育普及活動をおこなっている。また、機関誌「聖書の世界」も発刊し、年会費を納めた会員へ頒布されている。資料館が主催となって研修旅行を企画し、イスラエルへ訪れ、教会や遺跡、博物館などを見学するツアーとなっている。このように、日本に馴染み深いとはいえない古代オリエントに関して、展示ばかりでなく、講演会、現地研修など多角的な取り組みをおこなっている。

聖書考古学資料館は、ビルの一室を利用した常設展示室のなかで、教育普及活動を積極的におこなっている。聖書考古学、そして古代イスラエルに関する知識を得ることができる展示室となっているものの、このテーマに馴染みの薄い日本人にとっては難解な解説もある。展示室の面積的な制限はさることながら、ビジュアル的なメッセージ性も乏しく感じられる。イスラエルやユダヤとの由縁が希薄であるが故に、来館者へ視覚的に伝える工夫も必要である。聖書考古学の成果から見出すことができる祈りの源流を、資料を通じて伝えられると、より一層の飛躍が期待される。

聖書考古学資料館

2. ドイツのユダヤ教展示

ドイツとユダヤに対する我々日本人のイメージは負の面が強い。その代表的要因には、ナチスによるユダヤ人迫害がある。ユダヤ人迫害はナチスが政権をとった1933年頃から始まり、アウシュビッツ強制収容所やホロコー

ストなど、凄惨な状況は今日でも多くの人々が知っている歴史的事実である。こうした背景があるなかで、ドイツの首都ベルリンには、ふたつのユダヤ教関連の博物館施設がある。ユダヤ教とベルリンの関係は、1671年にユダヤコミュニティが設けられたことが始まりであり、以降、関連施設がつくられていった。

⑴新シナゴーグと資料館—Foundation New Synagogue Berlin – Centrum Judaicum

ベルリン大聖堂からシナゴーグを望む

新シナゴーグ

ベルリンのミッテ地区を歩くと、ガラス製の金色ドームが目に入る。これが新シナゴーグで、ミッテ地区を象徴する建物となっている。新シナゴーグのドーム部分は、世界遺産のムゼウムスインゼル付近、さらにはベルリン大聖堂からも望むことができる、いわばシンボリック的な建物になっている。

シナゴーグとは、ユダヤ教の祈願、修行、教唆、集会場所のことである。ベルリンには、前述したユダヤコミュニティが1671年につくられることを端緒に、1714年9月7日、Heidereuterstrasseに最初のシナゴーグが奉献されるに至っている。その後、1859年5月17日、新シナゴーグの建設がはじめられ、1866年のローシュ・ハッシャーナー(ユダヤ暦の新年祭)に、ドイツ最大級となるシナゴーグが落成した。内部は3200席を擁し、金色の壁で覆われたドームの高さは50メートルで、進歩的な建設技術のためにドイツ内外でも有名になった。

しかし、ナチス政権によるユダヤ人迫害が強まるなか、1938年11月9日から10日にかけて“水晶の夜”に襲撃を受けて一部損壊、1940年にはドイツ国防軍によって収用、1943年11月23日にも攻撃をうけ、1958年には爆撃により全壊した。

今日ある新シナゴーグは、1995年5月7日に建設されたものである。ドーム部分まで登ることができ、そこからはベルリン市内を一望できる。新シナゴーグには、Foundation New Synagogue Berlin – Centrum Judaicum(以下、Centrum Judaicumとする)という財団がつくられた。Centrum Judaicumは、ベルリン周辺のユダヤ人の歴史を紹介することを目的として設置されている。さらに、ユダヤ人の偉業を讃えるとともに、ユダヤ被害者の記録保存を追求することを掲げている。その事業として、常設展はもとより、特別展や出版物によって、ユダヤ史を発信している。Centrum Judaicumは、西ヨーロッパと東ヨーロッパのユダヤ人との連動も視野に入れて活動している。

新シナゴーグ内に併設されていることもあって、雰囲気のある展示空間を演出している。展示資料の価値を最大限に活かすことができる空間に陳列されていることから、まさに質実両面を兼ね備えた教育的効果をひき出している。宗教施設内における展示室として、先に掲げた理念を果たすための十分な機能を果たしているといえる。さらに、ガイドツアーも取り入れられており、教育普及機能も充実している。

⑵ベルリンユダヤ博物館－Judisches Museum Berlin

ユダヤ博物館は、2001年にクロイツベルク区に開館した市立博物館で、ダニエル・リベスキンド(Daniel

ユダヤ博物館

ユダヤ博物館地下展示場

Libeskind）が設計した。旧プロイセンの高等裁判所であるコレーギエンハウスに隣接してつくられている。ベルリンには、1933年にユダヤ博物館があったものの、ナチスが政権を獲得したことにより1938年に閉館へ追い込まれている。第二次世界大戦後、再開の声が高まるなか、1975年にベルリン博物館内に「ユダヤ部門」の展示が設けられており、これがユダヤ博物館の再開の嚆矢となった。その翌年、ベルリン・ユダヤ博物館協会が設置されたことで、さらに機運が高まり、2001年に博物館が落成した。

展示室内はローマ時代末から現代に至るまでのドイツ・ユダヤ人について展示している。いわば、ベルリンにおけるユダヤの通史展示をおこなっている。また、ベルリン市立の建物であることから、ベルリンで暮らしたユダヤ人が生み出した文化の独自性を重視し、ベルリンの歴史にユダヤを位置付けたコンセプトで構成されている。ユダヤの生活をあらわす資料はもとより、結婚誓約書や思想書などと幅広くベルリンとユダヤの歴史を知ることができる。特別展室に加え、地下には抑圧されたユダヤ人の歴史を示す展示空間がつくられている。“連続の軸”・“亡命の軸”・“ホロコーストの軸”という通路は、いわば象徴的につくられたもので、幻想的な演出となっている。記念館的要素を含んだ建物となっている一方で、近代博物館として視聴覚機器を導入している。展示空間も立体的に展開され、演出にもレベルの高さを感じる。なお、ユダヤ博物館は建築学的にも貴重なものとなっており、国内外から注目を集め、多くの研究者が訪れているようである。

おわりに

以上のように、ユダヤ教の博物館展示について紹介してきたが、宗教は住民の日常生活と密接に関係していることから、宗教史ばかりでなく、民俗・民族学的要素を包含しながら展示されていることがわかる。さらに、宗教は国家や地域主権のもとで受容されているために、国家政策と宗教との歩みを同時に知ることができる。日本にはユダヤに関する展示はほとんどみられず、独立した建物としても皆無であろう。それは、ユダヤ教と日本国家との宗教的関係が希薄であったことにほかならない。

ベルリンにあったふたつのユダヤ博物館は、ドイツとユダヤの歴史的関係性を直視し、負の遺産をも展示に盛り込むことで、ベルリン通史展示といえる内容となっている。これはドイツ政府の歴史観にも直結するところといえ、ベルリン市内にはいまなお、ユダヤ人迫害や東西ドイツ分断期のベルリンの壁も保存しているなど、当時の歴史のリアリティな部分を残したまま、教育的政策を展開しているところにも通じる。

新シナゴーグに併設された資料館（Centrum Judaicum）は、日本での社寺にある博物館や宝物館に相当するものとなっている。新設された博物館では得られない体験型展示をおこなっているといえよう。ユダヤ博物館に関しても、Centrum Judaicumよりも詳しくかつ的確な展示をおこなっており、両館は相互に補完関係にある展示内容となっている。ふたつが共存しえるコンセプトで博物館活動がおこなわれているともいえよう。

日本にある宗教博物館とベルリンの新シナゴーグとユダヤ博物館に異なる大きな点は、入口で厳しいセキュリティーチェックを受けることである。金属探知機を通り、係員から手荷物検査やボディーチェックを受けるのは、博物館としては異様な光景として目に映る。

博物館施設とは思えない厳重な管理体制であるが、こうした対応もドイツ・ベルリンのユダヤが歩んできた歴史を反映しているといえよう。さらにベルリンにあったふたつのユダヤ博物館は、負の歴史に対峙した展示がおこなわれている。決して過去を賛辞・美化するのではなく、冷静に過去と向かい合っている。両社とも将来へ脈々と事実を伝える重要な役割を担っているその姿は、宗教系博物館としてのひとつのあり方を示しているといえる。

ユダヤ博物館セキュリティ

新シナゴーグセキュリティー

■西南学院大学博物館2014年度秋季特別展
「ジュダイカ・コレクションⅢ　祈りの継承－ユダヤの信仰と美術－」出品目録一覧

番号	資料名	英訳	制作地/年代等	数量
序章　ユダヤの美術				
1	メノラー	Menorah	インド	1
2	香ショベル	Incense shovel	ローマ時代1世紀	1
3	トーラーとトーラー・マントル	Torah and Torah mantle	19世紀	1
4	ハヌキヤ	Hanukkah lamp	エルサレム/19世紀	1
Ⅰ.　信仰のかたち				
5	トーラーとトーラー・ケース	Torah and Torah case		1
6	トーラー・ケース	Torah case	イラク	1
7	トーラーとトーラー・マントル	Torah and Torah mantle	モロッコ/19世紀	1
8	ケテル・トーラー（冠）	Keter Torah（Crown）		1
9	ホーシェン（胸当て）	Tas（Torah Shield）		1
10	ヤド	Yad（Torah pointer）	バルカン 他	5
11	カポレット付パロケット（トーラー・カーテン）	Parochet　with caporet（Ark curtain）	モロッコ	1
12	メノラー	Menorah	コーチン	2
13	メズーザー・ケース	Mezuzah　case	マドリード	5
14	ツェダカ・ボックス	Tzedakah box		3
15	テフィリン（聖句箱）	Tefillin（Phylactery）		2
16	ネール・タミード	Ner tamid	チュニジア/19世紀	2
Ⅱ.　彩られた祝祭と儀礼				
17	ショファール（角笛）	Shofar　（Ram's horn）		1
18	エトログ容器	Etrog container	アメリカ/1987年 他	4
19	ハヌキヤ	Hanukkah lamp	ポーランド/18世紀 他	3
20	大型ハヌキヤ	Large hanukkah lamp	ダマスカス	1
21	メギラー	Megillah	モロッコ/18世紀 他	2
22	グラッガー（ノイズメーカー）	Grager（Noise maker）	ポーランド/19世紀 他	2
23	サラエボ・ハガダー（複製）	Sarajevo hagaddah（replica）	旧ユーゴスラビア	1
24	セデル皿	Seder plate	イラン/19世紀	1
25	キッセー・エリヤフー（エリヤの椅子）	Elijah's chair		1
26	割礼器具	Instruments of circumcision	モロッコ	3
27	割礼式用キドゥシュ・カップ（コス・ハブラハ）	Child's kiddush cup		2
28	ヴィンペル（トーラー・バインダー）	Winpel（Torah binder）	ドイツ/1931年	1
29	成人式用キドゥシュ・カップ	Kiddush cup of Bar Mitzvah		1
30	ケトゥバー（結婚契約書）	Ketubbah（Marriage contract）		3
31	結婚式用指輪	Wedding ring		1
Ⅲ.　安息日の祈り				
32	シャバット・ランプ	Shabbath lamp	ガリラヤ/19世紀	1
33	安息日用吊りランプ	Hanging shabbath lamp	ドイツ/19世紀	2
34	スパイス・タワー	Spice tower	東欧	3
35	キドゥシュ・カップ	Kiddush cup	現代	2
36	シャバット・クロス	Shabbath cloth		1

終章　ともし火の系譜ー聖書考古学

37	平皿型ランプ	Flat plate type oil lamp	中期カナン時代 B.C.3100 ～ B.C.1850	1
38	深底平皿型ランプ	Deep flat plate type oil lamp	中期青銅器時代 B.C.1850 ～ B.C.1550	1
39	浅底平皿型ランプ	Shallow flat plate type oil lamp	鉄器時代、イスラエル時代 B.C.1200 ～ B.C.930	1
40	台付平皿型ランプ	Flat plate type oil lamp with a stand	B.C.1000 ～ B.C.600	1
41	ノズル付小型ランプ	Small oil lamp with nozzle	ヘレニズム時代 B.C.330 ～ B.C.63	1
42	小型ランプ	Small oil lamp	ハスモン時代 B.C.2世紀～ B.C.1世紀	1
43	ランプ	Oil lamp	ヘロデ時代 B.C.37 ～ A.D.135	1
44	装飾付ランプ	Oil lamp with ornament	ヘロデ時代 B.C.70 ～ A.D.150	1
45	装飾付ユダヤ・ランプ	Jewish oil lamp with ornament	2世紀～ 4世紀	1
46	メノラー装飾付 ユダヤ・ランプ	Jewish oil lamp with Menorah ornament	ビザンチン時代 4世紀～ 5世紀	1
47	魚尾型把手付 平型ユダヤ・ランプ	Jewish oil lamp with fish type handle	タルムード時代 3世紀～ 5世紀	1

第16回 特別展関連公開講演会〈入場無料〉

日 時 **12月6日(土)** 14:00～16:00　場 所 西南学院大学博物館2階講堂

講 師／内島 美奈子 氏（本学博物館学芸研究員）
題 目／「ジュダイカ･コレクションⅢ　祈りの継承ーユダヤの信仰と美術ー」

講 師／小林 洋一 氏（本学名誉教授）
題 目／「ヘブライ語聖書「詩篇」にみる信仰と祈り」

せいなんこどもワークショップ2014「ヘブライ語でうたってみよう」

日 時 **11月15日(土)** 10:00～12:00　場 所 西南学院大学博物館2階講堂

西南学院大学博物館2014年度秋季特別展
ジュダイカ・コレクションⅢ

祈りの継承
–ユダヤの信仰と美術—

協　　力　関谷定夫
編　　集　安髙啓明　内島美奈子
編集補助　山尾彩香　出口智佳子　下園知弥　阿部大地
英文翻訳　山尾彩香　出口智佳子　下園知弥　阿部大地
発　　行　西南学院大学博物館
〒814-8511　福岡市早良区西新3丁目13番1号
TEL 092-823-4785
発 行 日　2014（平成26）年11月7日
印　　刷　株式会社 インテックス福岡

一粒の麦から、
次の100年に向かって
100
Thanks and Next!

西南学院大学博物館

西南学院大学 SWINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM
www.seinan-gu.ac.jp/museum/